(二)討伐に任ずる部隊の心掛

治安肅正を完全に実施するためには、実力を以て匪賊を討伐するばかりでなく、意志が強固でない匪賊を帰順させるための工作や匪賊と住民を分離させて匪賊を孤立化させ生存することができなくする工作(治本工作と呼んで居た)など色々の方法を併せ行はなければ、効果を擧げることは至難である。帰順工作や治本工作を実施するには夫々専門の知識が必要であり、極めて廣い範囲に色々な方法を講ずる必要がある。従つて誰れにでもできる仕事ではない。併し、一度この仕事に携つて見ると仲々面白いものであり、やり甲斐のあるものである。

従つて動もすると、困難で疲労の多い、しかも危険な討匪行動に従ふより、帰順工作や治本工作を行つた方が興味深く、効果も目に見えるので、討匪行動を従とし易いものである。

しかし我々が特に注意せねばならないことは、匪賊に対しいかに上手に、しかも繰り返し繰り返し帰順工作を行つても、匪賊の勢が盛んな

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ときは、決して帰順するものではない。匪賊の冷笑を招くだけで匪勢は反て増大するのが常である。一方で連続不断、長年月に亘る猛烈果敢な討伐を行つて、衣、食、住方面から極力匪賊を苦しめ、意志薄固でない匪が山を下つて帰順しやうか、どうか懸うやうになつたとき、他方に於て私かに帰順の手を差し伸べたとき、始めて効果があがるものである。即ち討伐と帰順工作とは併び行はれることが絶対に必要であつて、どちらの一方が缺けても十分な効果をあげることはできない、治本工作も亦同じである。

嘗ての三省連合討伐に於ても匪賊（列兵）が帰順を始めたのは討伐開始後、凡そ八ケ月後の厳寒三月からであり、匪首が帰順したのは一年半後（満洲の二冬を経過してから）であつた。

かやうな有様であるから討伐部隊は他を顧りみることなく一意専心討伐に従うことが必須の要件である。軍隊が帰順工作や治本工作に関係することは絶対禁物である。たゞ討匪部隊と各工作部隊は一途の方針

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

で行動する必要があるので、両者間の統制、調協は上級司令部が担任すればよい。成るべく軍隊と工作隊間で直接連絡させない方がよい。軍隊が工作隊の工作を妨害したり、工作の秘密を漏洩したり、また軍隊が自分も工作をやりたくなつて邪道に陥り易いからである。

(三)匪道と匪跡

匪道や匪跡について述べる前、匪賊の蟠踞地域の細部について説明する。匪賊は特に勝算ありと思はない限り、進んで討伐部隊と戰鬪を交へない。山から山へ、森から森へと逃げ廻るのが普通である。

從つて、假りに間島省一省だけで討伐を始めると、從来間島省を根據として居た匪賊は隣の吉林省や、通化省に逃避するが、討伐が終るとまた元の地盤に帰つて来る。

そこで三省が連合し、互に協同して討伐を実施する必要がある。斯くすると彼らは自然、省境附近に蝟集する。各省の責任が最も不明な地點であり、各省の力が最も及ばない地域だからである。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

このことは省相互の間について述べたことであるが、県相互の間に於ても、殆んど同様なことがいへる。

また匪賊が重要な施設や場所（鉄道の横断點等）を横断するのは大抵同一地點である。従って其処には必ず匪賊に対して軍隊や警察の状況を密報する通匪者が潜んで居る筈である。だから早く匪道を偵知すれば、匪賊を待伏することもできる訳である。色々な情報により匪道が豫想できたなら早く密偵を配置することである。密偵は匪道と豫想する地域の住民であり、そこに定住する者を獲得すれば最もよい。この寫真で言うならば鉄道の南北地域に於ける匪賊の出没地区から判断すると、匪賊は蚊河から明月溝間で鉄道を横断して居ると想像できる。そこで、この間にある部落に密偵を配置する訳であり、その密偵は従来から、その部落に居住して居る者を手に入れることである。

このことは山岳の密林地帶でも同じことが言へるが、そこは殆んど無住地帶であるから、移動密偵を活用する以外に方法がない。この密偵

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は帰順匪賊一特に同一匪団に属して居た者一を使用することができたら最も良好である。

次は匪跡であるが密林中を討匪して居ると、匪賊の足跡や、宿営地の跡を認める。そのうちの新しいものを辿って追撃すると多くの場合、捕捉することができる。たゞ匪賊も途中で足跡を消すため、急に足跡を各方面に分散したり、或はカンジキを穿いて足跡を残さないやう心掛けたり、偽りの露営地を作ったりして、討伐部隊の目を眩ますことがあるから注意する必要がある。

四 警防所

前述したやうに、匪道が大体一定して居るとしたら、匪道の要點に待伏して、匪賊を奇襲することもできる。しかし、いつ何時通過するか判らない匪賊を待つて居る訳にいかぬ。殊に酷寒時であれば、長時間露天で待伏することは殆んど不可能である。

そこで警防所の必要が先じて来た。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

警防所は寫真才十のやうな木造の簡易な建物である。しかし防禦設備は勿論のこと、匪賊から奇襲された場合、建物の中から応戰できるやう、射撃設備も、防彈設備も（匪賊が裝備して居る手榴彈や機関銃彈を防ぎ得られる）施してあるし、警防所の周囲には簡単な壕もあつて、匪賊の接近が防げるやうに造つてある。

嘗ての三省連合討伐に於ては、かやうな警防所を匪道の要點に数十個築造し、少数部隊を常駐させておいた。

これはこの討伐で始めて試みた手段であるが、討伐部隊や附近の住民にとつては大へん好都合であり匪賊にとつては極めて目障りな存在だつたらしい。

即ち彼らが從来から通路として利用して居た道路（道路と呼ぶにはあまりに貧弱で、稀に木樵が歩く程度の道）が使用できなくなつてしまつた。だからといふて他の場所に道を求めることは山岳と密林のため、容易でない。やつと発見したかと思うと、間もなく、その道にも警防

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

所ができる。かくて匪賊はその地域に蟠踞することを、あきらめざるを得なくなり、他の方面に移つていく有様であつた。

なほ小兵力の討伐部隊は警防所を利用して厳寒時であつても安心して宿営ができたし、時には警防所から食糧や弾薬の補給をうけることができたから、極めて好都合であり、警防所を造つてから、討伐は著しく進捗した。

かくて住民は匪賊に内通することや、衣食の援助を行うことを止めたけれど内心はビクビクでいつ匪賊に襲撃されるかも知れず、常に不安を感じ、官憲に従うべきや、従来の通り匪賊に協力すべきやと、まだ迷つて居る者も多かつたやうであるが、要所要所に警防所が造られ、そこに軍隊や警察官が常駐し、部落に急があれば即刻駆つけて呉れる有様を見て、やつと安堵し、心の底から討伐部隊に味方するやうになつた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

匪賊討伐を実施するに当り、毎日、兵營や警察署や住民地（住民地に討伐部隊が宿泊することは、何かにつけ、住民との間にトラブルが起つて面白くない。殊に異民族（漢人と朝鮮人の間）のときは圓滑にいかぬことが多かつたので極力避けて居た。）から、朝、晩山岳地帯に往復するのでは無駄な時間を費すことが多い。それかといつて、山地内に露營することは夏季ならいざ知らず、冬期は非常に困難である。そこで長期に亘り匪賊地帯に駐留し、隨時、叩き潰を失せず討伐に出動する必要が生じて来た。

この必要から考案されたのが匪化地帯に於ける穴居生活（篇真才十一参照）である。

前に述べた警防所は地上に露出して居るので、厳寒時の防寒は容易でない。その上、相当大きな部隊を駐留させる為には建築は容易でない。地下に設備することは労力こそ多くかゝるが、其の他の施設は比較的容易であり、厳冬でも十分防寒ができた。尚ほその施設を匪賊に秘匿

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

することも容易であり、たとへ匪賊から奇襲されても、設備の関係上安全であつた。

この地下設備の内部には、相当多量の食糧や弾薬を準備しておいたから、游撃部隊が臨時宿泊することもできるし、弾薬の補給をも担任することができた。

更にこの穴居生活の場所は警防所と異つて、生活の便を才一に考へて選定することができたから、水利、交通の便などを考慮して隨意に選ぶことができる訳である。

穴居生活を始めてから討伐部隊の疲労も軽減できたし、游撃して居る討伐部隊との連絡も容易になつた。即ちこれらの部隊は殆んど毎日夕方になると、こゝに帰つて来るし、いくら長くても三日目には、一応この穴倉に帰るからである。

かく穴居生活を始めてから、討匪行動は甚だ有利になつた。しかし、従来の討伐方法である兵営や、警察署を基地として討匪に任じた部隊

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

も依然繼続併用せられ、これらは、比較的山岳地帶の入口方面を担任した。

(六)密　偵

匪賊の情報を收集することは至難である。飛行機も殆んど役に立たない。飛行機の捜索で知り得ることはケシの密作を知って、その附近が匪化地帶であることを推知し得るだけで、匪賊そのものを捕へる訳には、いかない。また討伐部隊自ら斥候を派遣して匪情を知ることも期待できない。一般の戰鬪ならば、敵の居る地域は大凡の見当がつき、その細部を捜索すればよいのであるが、匪賊はその処在の見当すらつけられないのである。而も小部隊毎に別れて行動して居るのが普通だから、匪賊の処在を適時に知ることは至難中の至難である。從って匪賊が警察を襲撃したり、鉄道の運行を妨害したりすれば、匪情を匪賊自らが、官憲に知らせてくれた結果になって討伐部隊にとっては甚だ喜はしい結果になるのであるが、老練な匪賊はこの間の事情を十

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

分辨へて居つて特別な場合の外（軍、官、憲が他方で多忙を極め、匪賊の蟠踞地帶に対する警戒に手がまはりかねて居るとき、または軍、官、憲の力を分散させやうとするとき、例へばノモンハン事變で関東軍の注意が西方に向いて居るとき、東満で鉄道の運行妨害や警察を襲撃したなど）は決して、そんな下手なことをしない。もし特別な状勢でもないのに、かやうなことをする匪賊があつたなら、それは極く新米な奴らと思つて殆んど間違いない。特に討伐を開始してからは、匪賊が進んで鉄道妨害や警察署、県公署などを襲撃することは殆んどなく、只管、身を隠すことに專念するのが通常である。然らば匪情をどうして偵知するのか、それは密偵の働きによるほか方法がない。

(1) 密偵とは

密偵とは私かに備つた探偵である。密偵を本業とする人間は満洲の至る所に居る。密偵の大部は漢人であるが鮮匪の蟠踞する地域なら朝鮮人の密偵を使用するのが最も効果的である。彼らは所在の住民と同じ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

生活をなし、交友も多いので警戒され、敬遠されることが少ないから五九
である。時として固定した密偵を使用することがある。（匪道に配置
する密偵）、かやうな者はその部落に定住し、一般住民と同じやうに
農耕を営むものが最も適任である。

(2) 密偵の適格性

密偵として具備すべき性格をあげるならば、

(イ) 年齢が若く活動的で責任観念の強い者

(ロ) 秘密を漏洩しない者、時として密偵になつて討伐隊に傭はれたこ
とを得意顔に、我は密偵なりなど吹聽して、何か權力を与へられ
て居るように振舞う者があるから注意する必要がある。朝鮮人の
密偵にかような者が比較的多かつたように思う。

(ハ) 匪賊と縁の深い者なら殊に妙である。匪賊の中に友人が居たり縁
戚関係の者が居たり、或は嘗て匪団で生活したことのある者なら
匪団の内情を知つて居るから匪情を知ることが容易である。しか

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

し破廉恥的行為によつて匪団から排斥されたやうな者は全然利用価値がない。

(3) 密偵の使用法

密偵を使用する場合には、知ろうと欲する事項と報告すべき、日時、場所だけを明示する。それをどう利用するか、何のために知りたいのかなど、目的を示してはならない。またこちらで知りたい事項を、どんな手段で探知するかは、密偵に一任することが必要であつて、細かいことを示すのは害あつて益がない。

また連絡すべき場所については特に注意が肝要であつて、できるなら兵営とか、警察署を避けるがよい。もしどうしてもこれらの場所で連絡せねばならない場合には密偵との間に十分月日時刻の打合せを遂げ（できるなら夜がよい）その時刻に、責任者が営門や警察署の玄関まで出迎へることが望ましい。さようしないと衛兵が知らずに密偵を斧めたり、または必要以外の者にまで、密偵であることを暴露し易いか

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

らである。

かような訳だから、連絡の場所は人目につかぬ山の中か、森の中か、部落の端あたりが無難であろう。こちらから密偵の家を訪ねることは、絶対禁物である。

次は密偵に対する報酬であるが、最初から金を与へてはならない。金を与へてからだと、真面目に匪情を探知する密偵は少ない。

密偵が持ち帰つた情報の価値に応じ、報酬の多寡を決定して与へるがよい。尚金を与へるときは、金離れよく、時には褒賞として何程かを臨時に与へることは効果が多い。しかし金の多寡だけで、密偵の働きを左右しようとしてはならない。精神的に彼らを労うことを忘れてはならない。密偵との間が親しくなればなる程さうである。終に彼らはこちらの意氣に感じ身命を擲つて働くようになる。殊に權力者から精神的に厚遇されることは、彼らの最も名譽に感じる所であることを銘記する必要がある。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

また密偵によっては偽りの匪情（悪意を以て、又或る者は悪意はないが匪賊の逆宣傳を真と思って）を持ち帰ることがあるから注意を要する。密偵のもたらした情報は必ず十分に検討して真偽を確める必要がある。たゞし密偵の面前で、それは偽の情報であるとか、全く価値のないものなどと放言したり、罵倒したりしてはならない。斯かる場合には細部に亘り徹底的に質問し、彼の情報が誤りであったことを自然に自覚するようにするがよい。

殆んど無価値な情報を持ち帰った密偵は、大きな報酬を期待しないのが普通である。この粘漢人はいたってあっさりして居るから、心配する必要はない。たゞ朝鮮人の密偵はそう簡単でなく、自分の働きを吹聴する者が多いようである。

最後に密偵から匪情をきくときはできるだけ使用者と通訳と密偵のみ集まるがよい。通訳も使用者と同一民族がよく、密偵と同民族の者を使用しないがよい。密偵の身分を保護し、秘密を保つ為からもかくす

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

るのが有利である。

才二款　治本工作

其の一　匪民分離

「民衆を離れて共匪なく、共匪の最も恐れる所、民衆の離叛とす」とは過去に於ける滿洲匪賊と住民との關係を喝破した名句である。すでに縷々述べて來たように住民の協力なくして匪賊の生存なく、從つて治安確亂の活動なんか、想ひもよらぬことであつて、匪賊の活動と所在住民の協力とは正に比例すると申して差支へない。かような状態だから、治安を肅正するに當つては、草蹊、警察などで、猛烈果敢、連續不斷、長年月に亘る討伐を続行すると同時に、他方、別な機関で住民を匪賊から分離して、官憲側に味方するように工作しなければならない。この工作が即ち匪民分離である。

〔敵治の滲透〕

近代の文明國に匪賊や、これに類するものが存在して居るだろうか？強盗團と名づけられるものが稀に出現することはあるが、その敵たる

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

や数名か多くても十名以内のものであり、凶器も精々ピストル程度以下であつて、満洲匪賊のように、部隊を編成し、重機関銃や、その他の自動火器を装備して居るようなことはない。

満洲国は建国後、日なお浅く、国内は改革に次ぐ改革で目まぐるしい在、一般の住民は唖然として、為すべき所を知らず、殆んど一政府は政府、我は我れ」の無関心的態度で居た者が多い。由来古老連中は保守的な人が多い。満洲国ができてから殆んど毎日のように新法令が発布される。その大部のものは、国民の負担に関係があり、義務を加重する。税金は多くなる。その税金の大部は都市の建設や軍隊、警察の整備に費消されて、農山村方面は捨て、省りみられない。嘗ての張作霖や張学良時代の方が呑氣でよかつたと過去を懐んで新満洲国を白眼視する人種も居る。旧軍閥時代の軍人は職を失つた。これらの軍人はその能力や経歴の関係で満洲国の軍人に採用されず遂には浮浪者となつた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

その上、種々の事情から、満洲の建国を喜ばず、何とかして、その進歩発達を妨害しようとする国々がある。

更に又、満洲国官吏が大都会や中都会には進出して、施政に熱意を示すが、一歩、都会や鉄道沿線を離れると全く放任の状態であつた。

中央政府の官吏も、省の官吏も役所の中で、机の上で計畫するだけ、末端の県や部落民の実情を十分認識しないのぢやないかと疑うふしも澤山ある。或る省長は在任一年有半の間、省公署所在地と鉄道沿線の安全な地区のみ巡視して、省内山間部の県公署に、一度も足を運ばない有様であつた。

彼の辯解によると、途中の治安が悪く、視察する氣持は持つて居たけれど、果すことができなかつたとのこと。

省長に於て然り、省首脳の各庁長も大体、これと同様であつたから県公署の役人は山地の奥深い離れ小島で、匪賊や、匪化された住民に囲まれながら、淋しく執務して居る有様の所も相当にあつたと思う。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

かゝる有様であるから、住民は満洲国政府の命令に従うよりも、所在匪団の命令に従った方が、身の安全であり、利益でもあった。かくて匪民は完全に一体となり、持ちつ持たれつの結束を固くし、たゞ獨り、満洲国の県公署役人や田舎の警察官が取残されたやうな状態であった。匪賊の跳梁地帯の実情が、かく出鱈目であることを知った討伐隊司令部や満洲国中央政府は、会議の結果、次に述べる諸々の方途を講じて匪民を分離しようと試みた。

(1) 道路の構築

すべて、匪賊は交通不便な山岳地帯を根據にして活動する。これは軍隊や警官隊の討伐が困難だからである。従って彼らの根據内に道路、殊に自動車道路が縦横に通じて居たら、匪賊はもはやその地帯を根據地とすることは出来なくなり他の地に移転するか、帰順して匪賊稼業を止めるか、或は滅されてしまうかである。これは官憲が匪情を得るに便になるはかりでなく、匪情を得れば直ちに自動車を驅って現場

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

にかけつけることができ、匪賊は絶えず不安危険にさらされることになるからである。

これと同じ意味から、所在の住民も、適時に軍警の援助をうけることが期待し得るので匪賊から離れて官憲側に寄るようになり、匪賊は孤立化し、終には存在できなくなる。

こゝに着意した結果三省（間島、吉林、通化の三省）連合討伐に於て、これら三省の省境地帯（匪賊が好んで巣窟した地帯）に凡そ千粁の自動車道路を新設し、更に約六百粁を修理して自動車の運行を自由自在にした。この附近一帯は標高八百米から千米の山々が連続し、原始林で覆はれて居所が多く先づ人跡未踏の地であり、政治力の全く及んで居ない地域であつた。

連合討伐隊が通化、吉林、間島の各省から同時に討伐を開始すると、多くの匪団は逐次、山奥深く逃避して蟄塞し、討伐部隊が引上げると再び平地近くに現はれる始末であつたから、彼らを徹底的に掃蕩する

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

には、その根據地を覆滅しなければならない。それには先づ道路の建設が才一であつた。そこで討伐隊司令部は滿洲國政府を動かして道路構築の費用をださせ司令部の統一計畫下に一道路網は単に討伐実施の見地からばかりでなく、將来の産業道路として十分利用し得ることを考へて決定したことは勿論である。一三省は分担させて実施した。

すでに述べた通り、夏期の討伐は困難な上効果は十分あがらなかつたから、その時期を利用することにした。

この大事業を完成するためには、莫大な勞務者を必要とした。その勞務者の大部は所在の住民から集めねばならない。從つて農閑期だけ使用できる。各省当局は不眠不休、計畫の立案に、現場の監督指導に文字通り寢食を忘れて努力した。その結果、この難工事も昭和十五年九月末、漸く完成した。

私はその一部凡そ三百粁の竣工檢査に立会したが、一よくも、かような山岳地に、かくも立派な自動車道路を完成したものである。そして

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

人々の熱意と努力に感歎した次第であつた。」

私が竣工祝賀に立会した道路は次の通りだつたと記憶する。

樺甸（吉林省東南部）―老金廠（こゝには、採金、精錬の工場があつて、日満人数百人が働いて居た）―夾皮溝（この附近から山険し）―傷溝河―大捕財河（この附近住民多く農耕に好適地あり）―寒葱嶺（この附近山地は大木の密林地帯）―敦化（連合討伐を開始するまでは敦化及この南方太平山一帯の地区まで匪賊がはつこして居た）尚は当時構築した主要なものは撫松―白頭山、濛江―樺甸、敦化―鏡泊湖、大捕財河―安図、安図―白頭山等の道路である。

以上の道路が完成した昭和十五年の冬期討伐は極めて順調に進捗し、九月末には匪首朴得範を逮捕し、同十一月には兵団長帰順し、十二月初旬には東北抗日才一路軍才三方面軍司令官頭領章を射殺し、更に翌十六年二月末には、東北抗日才一路軍の総司令楊靖宇を射殺してこの地帯を清掃し、その後全く匪影なしといふまでに治安を回復することができた。たゞ残念だつたのは金日成が逸早く入ソして遂に捕

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

捉できなかったことである。

爾後この道路（自然地に構築し砂利も砕石も入れて居ない道路）の保持、修繕の方法を、どうするかについては、その当時から懸念していた事であるが果して、どうなったか、昭和十六年三月満洲を去った私は、その後の様子を知らない。

密林中に於ける道路構築の状況は寫真才十二及才十三の如くである。

(2) 集団部落

匪賊と住民との連かりを断つため採用した方法として集団部落がある。民家が點々へ散在することは、とかく匪賊に利用されがちであった。即ち匪賊は、これら離隔して居る一軒家から、討伐部隊の状況をきいたり、醫藥品とか、日用品とかを、依頼、購入して居た。而してこれが監視は非常に困難であり殆んど不可能に近かった。そこで、これらの點在農家を一ケ所に集め、匪賊と密通することを監視すると共に部落を匪賊に対して掩護し易くした。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

集団させられたため農耕に不便な者も居たが、集団させた理由を説明し治安がよくなれば、当然再び分散するのだし、農耕に不便な者に対しては、農繁期に、特別の援助を与へることにした。集団部落が完成すると、そこに十名内外の警察官を常駐させて、住民の通匪行動を監視しながら、住民を守り、かつ匪情の探知も実施させた。

かくて、住民と匪賊との間は漸次、分離され、匪賊は益々困窮した。その外住民の中から適当な者を選んで集団部落内に密偵を配置し、また集団部落から通匪者がでた場合部落の有力者に連帯責任を課した。従つて部落民は自ら相戒しめるようになり、各集団部落とも自警団を編成し、部落の周邊に土壁や壕や、木柵を作つて匪賊の侵入を防止し、また部落民が、必要以外に、部落の外にでることを監視するようになつた。（寫真才十四参照）

遂に、住民自ら竹槍や棍棒を以て匪賊と交戦する意氣を示すようになり、集団部落の目的を達成することができた。（寫真才十五参照）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

短期間に住民がかように變つてきた最も大きな原因は、住民が「軍隊や警察官が匪賊を徹底掃滅するまで、討伐を続行する」ことを知つたからである。

(3) 住民の作業援助

治安肅正を行うに当つて、所在住民の協力は、絶対不可缺の条件である。三省連合の討伐に於ても、当初の間こそ、住民は「我不関」の態度であつたが、長日月に亘る討伐部隊の討匪行動と、住民に対する軍隊や警察官の親切な態度に感激した結果、既述の道路構築にも、進んで参加し、また集団部落を作るに当つても、仕事の不便を忍んで、小よく心じる有様であつた。

住民の感情がかく好転した裏面には、次に述べるような、軍隊や警察官や協和会員の住民援助の善行が秘められて居ることを忘れてならない。それは警療班の派遣による住民患者の施療と農繁期に於ける收獲援助である。（寫真才十六参照）斯くて住民の感情は好意から感謝に

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

變り治安は見る見る回復した。

「住民を離れて共匪なし」とは正に千古不磨の原則である。匪賊を考へる前に、先づ彼らの溫床である住民を考へ、住民を自分の陣營に引き込むことを忘れてはならない。

(二)帰順工作

匪賊を帰順させ、正業につかせるようするためには、実力を以てする討伐と住民を匪賊から分離させる工作と、直接匪賊を説得したり、謀略によつて帰順させる工作との三つが併行されなければならない。然しながら帰順工作は前二者に比べると、相当遅く開始すべきものである。即ち匪賊が帰順の氣持を抱くようになるのは、討伐で苦しめられ、住民から見離されて、どうにもならず將来に希望を失ひだしたときであつて、まだ匪賊の勢が強いときに帰順を勧めても、応じないばかりか、多くの場合、反て軽蔑を招くものである。

特に苟くも匪首と呼ばれる程の人間となると、帰順といふことは殆ん

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ど望み得ない。謀略を用いて捕獲するか（極く稀に成功することがある）戦闘によつて射殺する以外に方法はない。

特例として昭和十四年二月頃東北抗日第二路軍総司令（名を忘失）が三江省西南部の山を下りて帰順した事がある。

この匪首は帰順後、関東軍司令官植田大將の配慮によつて三江省勃利に居を構へ。協和会幹部として、旧部下匪賊を帰順させるべく努力して居たが、小ない日、満官吏の態度に嫌氣を催し、再び山に入つて匪賊になつた由である。何故彼が再び入山して匪化したのか。彼が無学文盲であり、且かつて彼のため死傷した日満軍警は多くその恨みを忘れない者が相当あつたので、これらの人々が彼を白眼視し、軽蔑した。遂に彼は平地に居るのが嫌になり、折角更生して日満両国のため働こうとした決心を挫折してしまつた。

先に起きた馬占山背叛の原因も、これに似て居た（特に彼の無学を軽蔑した）と聞くが、帰順後の取扱については十分研究しておく必要が

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

あると思う。

匪首、殊に相当年輩の匪首には無学者が多いが、私の経験によると、苟しくも匪首と呼ばれる程の者は、どこかに取得があるものである。人物がよい、腹ができて居る、統御力がある。だからこそ多くの匪賊がそれに服従して困難、危険な匪賊稼業をやって居る訳である。帰順した匪首は必ず利用価値があるものである。

帰順工作に依る匪首帰順の一例は寫真才十七の如くである。

(1) 親戚、縁故者による工作

先づ匪賊の父母、兄弟、妻、子、その他、縁戚の者、親友の有無を調査し、その所在を知り、彼らを使用して帰順を説得することが、早道である。謀略によって捕獲した朴得範は親友によって誘き寄せた結果であり、金光の帰順は兄弟によって説得させたのである。たゞ、匪賊が帰順した後の生命や生活の保護を堅く約束し、かつ確実に実行することである。彼らが帰順を躊躇する最大原因は生命の不安である。帰

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

順しても死、しなくても死、然らば最後まで暴れ廻る方が面白いと思う。匪賊相互の間でも、かく言うて宣傳し、匪団の結束が緩むのを防いで居る。

また匪首は滿洲以外を知らない。滿洲でも文化の発達して居る都会の様子を知らず、遠びな田舎の小都会か、農村の原始的な生活しか知らない。従って事実無根の宣傳に乗ぜられ実現不可能な夢を抱いて、匪団に身を投じて居る者が多い。（匪団の中には拉致されたため、不本意ながら匪賊稼業をやって居る者もある。）嘗て朴得範と金光とを東京に招致して、所々を見学させ、観兵式を見物させた後、彼らから所感を求めた所、日本の実情をみて驚歎し、匪団に居たときの大望は全く架空のもので、実現不可能であることを自覚し、帰満後、全く別人のようになり、身を挺して匪賊の説得にあたったと聞く。

(2) 特捜班による工作

特捜班と稱するは、嘗て匪団に居たが、その後帰順した者を集めて編

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

成し、帰順工作に使用したものである。

「蛇の道は蛇」の諺通り彼らは匪賊の生活や行動、戦闘の方法などを一番よく知って居る。

彼らは進んで匪賊を誘引して捕捉したり、匪道の要點に待伏せしたり、匪団警戒の間隙に乗じたり、要路襲撃ならない行動で、匪団を攪亂し、匪団結束の亂れに乗じて帰順の手を差延べ、大きな効果をあげて居た。彼らが喜んで働き、その全能力を発揮するようにするためには、班長の選定が特に重要である。彼ら漢人でも、朝鮮人でも、「あの人のためなら、死んでも悔いない」という氣持は多分にある。

「赤心を他の腹中におく」と云ふ東洋的な血盟的団結でなければ、十分な働きを期待することはできない。

其の二　宣　傳

(一)　方　法

匪賊に対する宣傳の方法として、過去の経験をあげるならば

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

1. 飛行機により、宣傳ビラを匪賊地帶に散布する方法

この方法は多大な経費（飛行機に要する経費と宣傳ビラも莫大な数を必要とする）かかゝる割に、宣傳効果は、左程大きくない。殊に樹木が繁茂して居る夏期は殆んど効果がない。

2. 討伐部隊自ら宣傳ビラを携行して、匪道と想像する地點に散布する方法

この方法は最も効果があった。帰順した匪賊の多くは、我が方の宣傳ビラを持って居た。

3. 匪道と想像する附近の樹皮を脱いで、宣傳文を墨書する方法

この方法は、宣傳ビラのように、廣く実施することは困難であるが、相当の反響があったらしく、帰順した匪賊の凡そ半数は、我が方の宣傳文を見たと述べて居る。

（註）匪賊の中には多数の無学文盲者が居るけれど、一部の有識者から口傳へに聞くようである。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

匪賊に対して直接宣傳を行うと同時に、匪化地帶の住民に対しても宣傳する必要があるそれは匪化住民を匪賊側から分離して、我が方に味方させることに役立つばかりでなく、これら住民は陰で匪賊と連絡して居るのが普通であるから、間接であるが匪賊に宣傳することになる訳である。その方法として

1. 宣傳ビラを散布することは勿論であるが、別に宣傳員を派遣し、スピーカーなどを利用して、住民を啓蒙する方法

派遣宣傳員の選定に当っては部落住民に名の知られた人物、人望のある男がよい。また朝鮮人部落に対しては、朝鮮人の宣傳員を、漢人の部落に対しては漢人の宣傳員を派遣するようにするが効果的である。

2. 匪賊の苦境にある状況や、帰順した匪賊の生活状況や（本人の談話を掲載すれば一層よい）討伐部隊の強固な決心や、威勢のよい寫真などを掲載した新聞を匪化住民地に配布する方法

以上述べた方法は、討伐開始の当初から実施したが、匪賊が窮境にな

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

らない間は殆んど効果があがらなかつた。從つて宣傳を実施する際は、討伐の進捗とにらみ合せて、重點を注ぐ時期を判断することが必要である。

(二) 内　容

宣傳文の内容については、実施の時期（討伐の初期、中期、末期など）を指す）宣傳の対象などによつて、差異があるが、次の内容が含まれて居ることが必要である。

イ、討伐は徹底的に実施し、匪賊を撲滅しないうちは、絶対にやめないこと。（勿論、実際もその通りやること、言行一致しないことがあると、信用を失ひ、將来に亘つて宣傳の効果をあげ得なくなることに注意する要がある）

ロ、討伐によつて、匪賊が苦境にあることを実例をあげて（できれば寫真）説明すること。

討伐部隊の戦果、特に匪首を斃したときは、その姓名、月日、

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

場所、交戦の状況、遺品、その他できるだけ微に入り細に亘り、具体的に記述したり、説明することが必要である。

3. 匪団から脱出して帰順する匪賊の状況を詳細に記述すること。この際、数や、姓名、場所、日時などを明示し、匪賊が自分で「みゝ、これは真実だ」と思はせるようにしなければならない。決して事実でないことを記述したり、誇張して説明してはならない。逆効果を招くことがあるからである。

4. 帰順した匪賊の取扱法について

官憲の勧告に応じて、前非を悔い、正業に就くため帰順した者に対しては、生命、財産を保護することを宣言した場合は、必ず宣言通り実施し、帰順者が、その後いかに生活し、いかに発展して居るか、その様子を詳しく、具体的に、できれば寫真を挿入して證明することが効果的である。

(三) 文

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

宣傳文を平易な、教育程度の低い匪賊でも讀むことができ、かつ意味がよく併るようにしなければならない。

また文は支那語と朝鮮語と二通りで記述する必要がある。

要するに、宣傳は討伐行動の一重要部門ではあるが、長年月に亘る果敢な実力行動と併行して、始めて効果をあげるものであることを銘記すべきであつて、飽くまで補助手段である。

結　言

滿洲に居つた匪賊について過去の経験から結言を述べるならば、次の諸項を実施する必要があろう。

一、匪賊を支援して居る陰の勢力と匪賊との連絡を切断すること。

二、政治の滲透によつて匪、民を分離し、匪賊を孤立させるばかりでなく、住民が進んで討匪に参加するように指導すること。

三、各省毎に個々別々な討伐をやらず関係ある省は一指揮官の統一下に、

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

八三

同時に実施して、匪賊が他省から他省に逃避するようなことのないようにすること。

四、匪賊と根氣比べをする意氣込で、長年月に亘る連続討伐を行うこと。

五、実力による討伐と併行して、治本工作、帰順工作を実施すること。

以上

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp